

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02268

研究課題名（和文）フェティシズムの思想史 19世紀西洋における「所有する主体」の誕生と身体

研究課題名（英文）History of the idea of fetishism: the born of the "subject-proprietor" at the end of the 19th century and its relationship with the body

研究代表者

橋本 一径 (Hashimoto, Kazumichi)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：70581552

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は以下の2点に要約される。

写真とフェティシズムの関係を解明することにより、美術史研究の枠組みにとらわれてきたこれまでの写真史研究を、西洋思想史の中に組み込み直した。とりわけ、写真を物理的な痕跡とみなしてきたこれまでの写真研究に新たな観点を提供することに成功した。

西洋においてフェティシズムの概念が出現した背景には、19世紀初頭における近代的な「所有」概念の成立があることを、思想的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義および社会的意義は、写真論と身体論の2点から説明することができる。

写真論については、これまで写真を被写体の物理的な痕跡と考える見方に囚われてきた議論に、イメージ人類学的な観点から新たな視座を切り開いた。その成果を日本語および英語の論文として世に問うた。

身体論については、身体と「所有」の関係について考察する3冊の翻訳書と、1冊の編著書を刊行するに至った。いずれも学術書であると同時に一般の読者にも開かれた著作であり、社会的な意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：The results of this research are summarized in the following two points:

(1) By elucidating the relationship between photography and fetishism, this research succeeded in integrating the history of photography into the history of Western thought. Above all, it succeeded in bringing a new perspective to the study of photography, which has traditionally considered a photograph as a physical trace.

(2) It showed that the emergence of fetishism was deeply linked to the establishment of the modern concept of "property" in the early 19th century in Europe.

研究分野：表象文化論

キーワード：西洋思想史 写真論 身体論 フェティシズム 写真史

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、本研究に先立つ研究課題「実証主義的家族 ベルティヨン家と19世紀末フランスにおける実証主義の具体的展開」において、アルフォンス・ベルティヨンの発明した「司法写真」が、被写体の「ありのまま」の姿を写した客観的な証拠として写真を用いるための技術であった点に着目した。写真史に目を向けてみると、写真は発明当初から「ありのまま」のイメージであるとの形容をされてきた。機械が自然を「ありのままに」写したイメージにすぎないとされ、当初は芸術から区別された写真は、やがて20世紀に入ると、むしろその「ありのまま」の性質が、痕跡性やインデックス性と名付けられて、積極的に評価されるようになる。しかし写真のイメージとはそもそも「ありのまま」なのだろうか？ しばしば現実とかけ離れた、二次元の小さなイメージにすぎない写真に、「ありのまま」の現実を見るということは、むしろ現代における「アニミズム」の実践とみなすべきなのではないだろうか？

このような問いを思想史に位置づけ直すことを可能にしてくれるのが、フェティシズムの概念である。19世紀に人類学者らによって導入され、事物への過剰な執着を批判する概念として広く用いられるようになったこの概念が、イメージの問題とも深く関係するのは、イメージが「メディア」という事物と不可分の存在であるからである。写真というメディアに「ありのまま」の現実を見ることを、ある種のフェティシズムと捉え直すことで、写真を西洋思想史の中に位置づけ直すことが可能になるだろう。そもそもフェティシズムという概念自体が、フロイトやマルクスにより応用され始めた頃と同じ意味で用いられ続けている稀有な用語であり、思想史的な見直しを必要としている概念である。このフェティシズム概念の思想史的な再検討にあたっては、ヒトとモノとの関係の変化に注目する必要がある。そのための手がかりとなるのが「所有」の概念である。19世紀初頭に法的主体が「所有する主体」として定義し直されると平行して、あらゆる事物は原理的に所有可能な「モノ」となった。そのような「モノ」に、使用価値や交換価値以上の価値を認めて執着することが、フェティシズムと呼ばれて非難される。つまりフェティシズムは、所有可能な「モノ」以外の事物の存在を認めない文化の症候であると、捉え直すことができるだろう。

以上を背景として、本研究は、主に(1)イメージ人類学な観点を導入しながら、写真の歴史を西洋思想史に組み込み直すこと。および(2)フェティシズム概念の思想史的な捉え直しを通して、「身体」をめぐる近代のアポリアを浮かび上がらせることという、2つの次元で繰り広げられることになる。

2. 研究の目的

上記を背景とする本研究の目的は、主として以下の2点に要約される。

(1) 写真とフェティシズムの関係を解明することにより、美術史研究の枠組みにとらわれてきたこれまでの写真研究を刷新し、写真を古代ギリシア以来の西洋のミメシス文化の中に思想史的に位置づけ直す、新たな写真論を構築する。写真の「真実らしさ」を、被写体との物理的な結びつきに求めていた従来の写真論を刷新し、写真が「ありのまま」に見えるのは、樹木などに生命を見出す呪物崇拝と構造を同じくするような、一種の集合的フェティシズムであることを明らかにする。言い換えれば、写真の発明とは、「ミメシス」すなわち自然の「模倣」を理想としてきた西洋のイメージ文化が、事故のように回帰させてしまった一種のアニミズムである。

(2) 西洋においてフェティシズムの概念が出現した背景には、19世紀初頭における近代的な「所有」概念の成立があることを、思想史的に明らかにする。フェティシズムとはモノに「所有物」以上の価値を見出して執着する行為を批判するために要請された概念であり、言い換えればそれは、所有可能な「モノ」以外の事物の存在を認めない文化の症候である。そのような文化にとってのアポリアとなるのが「身体」である。「身体」とはまさしく「所有物」に還元することが不可能なものだからである。このような所有できない「モノ」をめぐるアポリアは、たとえば「脳死」において私たちが直面する「ヒト」でも「モノ」でもない身体の形で浮き彫りになる。基課題は、法制史の知見に、イメージ人類学な観点を導入することで、このようなアポリアの乗り越えを目指している。

3. 研究の方法

本研究は主として19世紀の伝語文献を中心とする文献調査によって取り組まれる。とりわけ上述の(1)については、19世紀に刊行された写真雑誌等の資料の調査によって、写真史研究においてこれまで注目されてこなかった細部を浮かび上がらせることを目指す。また、(2)についても、「所有」や「身体」といった概念の再検討のために、19世紀の法学的または医学的な資料が検討される。加えてこの(2)の観点については、本研究の思想的な裏付けとなるようなフランス語文献の翻訳という形でも取り組まれる。これらの成果は学術論文、共著書、翻訳書、学会発表等の形で、すでに公表してある。

4. 研究成果

本研究の成果は、上述(1)(2)に従い、以下のように整理される。

(1)に関しては、仏語論文“Un double fétichisme dans la photographie”(「写真における二つのフェティシズム」)(2018年)は、パリ第1大学のミシェル・ポワヴェール(Michel Poivert)教授とともに、2016年度に引き続き、2017年度に開催した国際シンポジウムでの発表を、改めて論文にまとめたものであり、そこでは写真とフェティシズムの関係の問題が考察されている。論文「いかにして私たちはイメージに生気を吹き込んでいるのか」ハンス・ベルティンク『イメージ人類学』をめぐってでは、ミメシスとアニメーションを対比させるベルティンクの議論を整理しつつ、それを写真論へと接続させることを試みた。また論文「イメージと聖なるもの」(2018年)は、写真研究を中心とする(1)と、身体論を展開する(2)との接続を図る研究である。同様に論文「人は生まれながらにして文書となれるか」生体認証の争点(2018年)は、本応募課題での争点である「個人」の問題と、写真論との関わりを明確にした仕事である。さらに論集『イメージ学の現在』(2019年)に寄稿した論文「不実なる痕跡 原寸大写真の歴史」は、写真が被写体の大きさを保持することの困難に注目し、写真を物理的な痕跡とみなしてきたこれまでの写真研究に新たな観点を提供するものである。なおこの論文の英語版(“An Unfaithful Trace: A History of ‘Life-Size’ Photography”)は、ドイツのDe Gruyter社より2020年7月に刊行予定の論集 Bilder als Denkformen(『思考形態としてのイメージ』)に収録の予定である。

加えて、2019年度には、写真雑誌『photographers' gallery press』の4年ぶりの刊行に尽力し、同誌に翻訳1本と論考2本を掲載した。翻訳として掲載したのは、パルカル・ブランシャールらの著による「野蛮の発明」であり、万国博覧会や写真メディアがいかにして帝国主義的な「野蛮」の表象を形成してきたのかを、批判的にたどった考察である。論考「フェティシズムとアニミズムの間にある写真」は、とりわけ本研究と関わりの深い考察であり、ポンピドゥー・センターで行った講演を収録したものである。もう一つの論考「何もしていない男」の系譜としての写真史では、かつては「何もしていない」として芸術家から区別されてきた写真家が、やがて「何もしていない」からこそ芸術家扱いされるようになる系譜をたどり直した。

(2)については、解説も手掛けた翻訳書『ドーピングの哲学』(2017年)は、スポーツにおけるドーピングを、人間が身体を所有物として自由に改変しようとする「エンハンスメント」文化の一環として捉え直した思想史的な著作であり、本研究の観点と共鳴する点が多い。そして論文「人間はいつから病気になったのか」こころとからだの思想史は、応募者が季刊の医学雑誌『Cancer Board Square』にて2015年10月から2018年10月まで10回にわたり連載した論考であり、現代の医学が延命治療や臓器移植などにおいて直面している難問が、19世紀初頭に、内視鏡などの診断技術の進歩により、患者の自覚症状がないまま病気が特定されるようになったこと、つまり「病気」と「病人」が乖離したことに起因しているとの主張を展開している。また所有に還元できない身体をめぐるアポリアは、具体的には臓器移植などにおいて生命倫理上の問題を提起しているが、応募者はこの問題に関して、編集を手掛けた論集『他者としてのカニバリズム』(2019年)に寄稿した論文「殺さずに食べること、あるいは新たなカニバリズム 培養肉をめぐる」で、臓器培養が投げかける問いを、生命倫理とは別の視角から考察することを試みた。

さらには西洋思想史における「所有」の概念の検討には、法制史的な観点の導入が不可欠であるが、コレージュ・ド・フランスの法学者アラン・シュピオ(Alain Supiot)教授の思想からは、この点について多くの示唆を受けており、応募者はこれまでに『法的人間』(2018年)および『フィラデルフィアの精神』(2019年)の2冊の翻訳と解説を手掛けることで、同教授の思想の日本への紹介にも尽力している。また、2019年度には、本研究からの助成を得て、シュピオ教授およびパリ第1大学の法学者ミュリエル・ファール＝マニャン教授の日本における講演とワークショップを組織した。フェティシズム概念の誕生と、「所有者」としての法的主体の成立の関係に焦点を合わせた本研究にとって、法学的な知見はきわめて重要であり、シュピオ教授の著書の翻訳と解説の執筆、そして両教授との議論を通じて、研究を深化させることができた。日仏会館で行われたシュピオ教授の講演は、研究代表者によって翻訳され、『日仏文化』第89号に収録されている。

以上のような本研究の成果は、研究代表者の次なる研究課題の着想にも結びついている。とりわけその中心的な役割を果たしたのが、上述の編著書『他者としてのカニバリズム』であり、この論集に寄せた論文で研究代表者は、臓器培養や培養肉の問題に取り組んだが、この調査を進める中で応募者は、19世紀末に、肉食主義の言説が大きく変化していることに気づいた。肉食主義自体は古代ギリシアにまで遡ることのできる思想であるが、動物福祉的な観点が現れるのは19世紀末のことにすぎず、それまでは肉食の人体への悪影響を唱える言説がほとんどなのである。このような家畜に対する同情的な視点の登場に着目することで、社会のイメージとしての動物の思想史的な変遷に着目する研究「蜜蜂から家畜へ 西洋における社会的動物の思想史」

の着想が生まれ、科学研究費（基盤（C））の助成を受け、2020年度より取り組みを開始している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 橋本一径	4. 巻 46
2. 論文標題 人は生まれながらにして文書となれるか 生体認証の争点	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 118-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 橋本一径	4. 巻 4
2. 論文標題 人間はいつから病気になったのか こころとからだの思想史 [第9回] 未生の生	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Cancer Board Square	6. 最初と最後の頁 366-369
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 橋本一径	4. 巻 5
2. 論文標題 イメージと聖なるもの	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Nyx	6. 最初と最後の頁 136-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kazumichi Hashimoto	4. 巻 6
2. 論文標題 Un double fetichisme dans la photographie	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Rilas Journal	6. 最初と最後の頁 485-489
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 橋本一径	4. 巻 4
2. 論文標題 人間はいつから病気になったのか ころとからだの思想史 [第10回] 痛みと生命	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Cancer Board Square	6. 最初と最後の頁 563-566
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本一径	4. 巻 3
2. 論文標題 人間はいつから病気になったのか ころとからだの思想史 [第6回] 「痛み」と「病気」の乖離	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Cancer Board Square	6. 最初と最後の頁 190-194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kazumichi HASHIMOTO	4. 巻 5
2. 論文標題 Debunking, ou le nouvel enjeu de la retouche photographique a l'ere numerique	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Rilas Journal	6. 最初と最後の頁 416-421
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 橋本一径	4. 巻 3
2. 論文標題 人間はいつから病気になったのか ころとからだの思想史 [第7回] 「動物には痛みがない」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Cancer Board Square	6. 最初と最後の頁 152-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本一径	4. 巻 4
2. 論文標題 人間はいつから病気になったのか ころとからだの思想史 [第8回] 身体 「資源」と「食物」の間で	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Cancer Board Square	6. 最初と最後の頁 164-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本一径	4. 巻 14
2. 論文標題 フェティシズムとアニミズムの間にある写真	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 photographers' gallery press	6. 最初と最後の頁 116-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本一径、倉石信乃、北島敬三	4. 巻 14
2. 論文標題 「何もしない男」の系譜としての写真史	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 photographers' gallery press	6. 最初と最後の頁 129-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 パスカル・ブランシャール (著)、橋本一径 (翻訳)	4. 巻 14
2. 論文標題 見世物ー野蛮の発明	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 photographers' gallery press	6. 最初と最後の頁 96-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アラン・シュピオ(著)、橋本一径(翻訳)	4. 巻 89
2. 論文標題 市場に蝕まれたデモクラシー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日仏文化	6. 最初と最後の頁 119-132
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 2件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Kazumichi Hashimoto
2. 発表標題 La photographie entre le fetichisme et l'animisme : Miyako Ishiuchi et une animation photographique des morts
3. 学会等名 LE BANQUET FANTOME(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazumichi HASHIMOTO
2. 発表標題 Un double fetichisme dans la photographie
3. 学会等名 国際シンポジウム「写真とフェティシズム」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 橋本一径、都留ドウヴォー恵美里、志村真幸、フォルカー・デース、倉数茂、木村朗子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 224
3. 書名 他者 としてのカニバリズム	

1. 著者名 甚野尚志、河野貴美子、陣野英則（編）、橋本一径ほか（著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 432
3. 書名 近代人文学はいかに形成されたか	

1. 著者名 フィルムアート社（編）、橋本一径（分担執筆）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 460
3. 書名 エドワード・ヤン 再考/再見	

1. 著者名 ジャン＝ノエル・ミサ、パスカル・ヌーヴェル（編）、橋本一径（翻訳）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 323
3. 書名 ドーピングの哲学	

1. 著者名 アラン・シュピオ（著）、橋本一径、高さやか（翻訳）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 347
3. 書名 法的人間 ホモ・ジュリディクス	

1. 著者名 アラン・シュピオ(著)、橋本 一径(翻訳)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 フィラデルフィアの精神	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----